夏休みのための200冊　トップ・専門家が推す“この本”

『東洋経済』第5367号 1996.8.17. 発行 pp.128 東洋経済新報社

1996-44

小室直樹の中国原論

橋爪 大三郎
東京工業大学教授

①小室直樹『小室直樹の中国原論』（徳間書店）

中国が一〇〇年の眠りから覚め、再び歴史の舞台に、巨大な超大国として登場しつつある。ビジネスに活路を開くためにも、国際社会の新秩序を構想するためにも、この偉大な隣邦を理解しないですますわけにはいかない。

しかし、情報が入ってくればくるほど、中国の理解は混乱していく。ある人は、中国人は約束を守らず信用ならないという。またある人は、中国人ほど信頼できる人びとはいないという。矛盾しているが、どちらも本当だ。では、中国人とは何なのか。

小室氏はそのカギを、歴史の中に求める。とくに注目するのは『史記』の刺客列伝だ。刺客は中国における人間関係「邦」の極限形を示す。これを補助線にすれば、中国人が人間関係を形成する基本原理を解明することができる。

氏の方法はあくまでオーソドックスに、マックス・ヴェーバーの宗教社会学の方法論を現代中国に適用したものである。読む者が読めば、そこから無尽蔵の含意を酌み取ることができよう。

おまけ　『Voice』特別増刊号　1996.10.1.発行　pp.212

PHP研究所創設50周年記念企画

日本の論壇500人 Who's Who

Voice
10月特別増刊号

西暦2001年の「幸福」を考える100人

橋爪大三郎（はしづめ・だいさぶろう）
●東京工業大学教授

一九四八年神奈川県生れ。東京大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士課程修了。

八五年に著わした『言語ゲームと社会理論』（勁草書房）でデビュー。以来、〈言語派社会学〉の立場から、社会システムや政治制度がいかに「言葉の用法」と密接不可分に生成されるか、あるいは、言葉を超えた「別種の現実」たる宗教がじつは「言葉の内側にある」ことなどを、現実問題に即して解き明かしてきた。日本語で社会学を行うのも、「日本社会の作動メカニズムは、日本語の与える現実から独立でない」とする認識から。現代思想の移植に汲々とする〝思想の貧血症〟状況に抗し、日本独自の言葉の用法＝「暗黙の前提」の解明に挑む。「思想とは、言語の個人責任の制度である」と語るだけに、いま最も了解可能な社会学者だ。

著書に『橋爪大三郎の社会学講義』（夏目書房、95年）など。

『場』No.7　1996.9.20.発行　pp.9.　こぶし書房

信頼すべき合理主義者

橋爪大三郎

吉本隆明氏の文章を通じて、三浦つとむ氏の存在を知った。そこで著作を何冊か読んでみて、感銘を受けた。それは学生時代のことだったが、いまでも仰ぎみるような存在として意識されている。

まず言わなければならないのは、氏が徹底した合理主義者であること。マルクス主義は唯物論であり、唯物論は無神論であり、無神論は徹底した合理主義の信念体系でなければならない。思考や行動を含めた全人格、全存在を合理的に組織するという気迫が感じられた。これは本物である、と私は思った。

つぎに氏が、観念や言語、記号といった、教条的マルクス主義がもっとも苦手とする分野に果敢に取り組んでいること。ソシュールや時枝の業績を踏まえ、批判しながら、科学的な態度によって精神現象や言語、記号の秘密を解明していく。その際、氏の駆使する弁証法のあざやかな手並みが、私にはたまらない魅力となった。

その影響もあって、ヘーゲルを読み、弁証法を学んでみたが、結局私はただの合理主義者にしかなれなかった。それでも、極限まで思考の道すじをたど

おまけ　『SAPIO』第8巻第10号通巻162号　1996.6.12.発行　pp.37

From Readers Special

麻原オウム裁判と死刑で誌上大激論

私は「人権」か「復讐」か!?「死刑」をこう考える

オウム真理教の教祖・麻原彰晃こと松本智津夫被告の公判は、ようやく第3回を迎えるところだが、初公判（4月24日）の地下鉄サリン、落田さんリンチ殺人等の罪状認否では被告・弁護団ともに認否を留保するなど、審理は出だしから躓いている。もっとも、他の教団幹部らの裁判の様子から推察すれば、いずれにせよ麻原＝極刑はまず免れない状況だろう。

本誌は昨年、この麻原裁判を念頭に置きつつ、未曾有の凶悪犯罪と死刑制度との相関について4回にわたって論争を提起した。

さらに、

●加害者の人権と被害者の人権
●死刑制度と冤罪の可能性
●世論やマスコミが裁判官に及ぼす影響、死刑判決基準の曖昧さ

――などのテーマに関して、投書を募ったところ、多くの読者からご意見が寄せられた。以下、それらの一部をご紹介することにしよう。

東京工業大学教授の橋爪大三郎氏は独自の視点でこう語る。

「伝統的に日本人は「村八分」が大好きな民族で、江戸時代までは犯罪者を空間的に隔離する刑でなるべくすませていた。しかし、明治政府が樹立するとそれができなくなり、同時に国家が国民を管理するために死刑という制度はなくてはならないものになっていった。日本人伝統の心性から言えば、死刑よりも無期懲役刑の方がなじみやすいとも言える」

私の三冊
『図書』　第571号　1996.12.10.発行　pp.65　岩波書店

●橋爪大三郎（東京工業大学教授／社会学）

(1)『宗教生活の原初形態』（デュルケム／古野清人訳／全二冊）
いわゆる「未開」社会の人びとの編みだした壮麗な精神の大宇宙。レヴィ＝ストロース以降の構造主義の源流がここにある。

(2)『価値と資本―経済理論の若干の基本原理に関する研究』（J・R・ヒックス／安井琢磨・熊谷尚夫訳／全二冊）
価格を鍵変数として構築された一般均衡理論の金字塔。社会科学の最大の成果のひとつとして、社会の科学を志す者は誰しもひもとくべき名著である。

(3)『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（ラス・カサス／染田秀藤訳）
西欧世界が第三世界にどれほど暴力的にふるまったか。想像を絶する破壊と蛮行の連続に、絶句するしかない。文明の原罪がここに示されている。

おまけ　『プレイボーイ』第31巻第39号　1996.10.22.発行　pp.250

先進5カ国対抗

# 官僚"けじめ"ダービー

★理解を超える？
韓国、中国の官僚事情

では、共産主義と体制に違いがあるが、中国の場合はどうか？
東京工業大学教授の橋爪大三郎氏が解説してくれた。
「なにしろ中国の企業は大半が国営企業で、官僚はそうした企業の指揮監督権を持っている。ですから、官僚は自分が経済活動をコントロールしていると思っています。当然、権力も大きいわけで、給料は報酬のごく一部、給料以外に多くの現物給付（住居、車、使用人……）が受けられる。そんな社会で日本的なけじめなんて理解すらできないですよ」

毎日新聞　（夕刊）1996年（平成8年）12月26日（木曜日）



## 私のおすすめ'96ベスト3

この1年を振り返るに当たり、毎月の「雑誌を読む」で時代を読み解いていただいている3人に、年間ベスト3を挙げてもらった。

●橋爪大三郎●（東京工業大学教授　社会学）

①日本国の研究（猪瀬直樹）＝文藝春秋11月号～97年1月号
②『サピオ』の一連の北朝鮮報道
③『中央公論』のフォーリンアフェアーズの翻訳シリーズ

### 北朝鮮問題での「サピオ」の意欲

日本の組織は自らの存続を自己目的化し、たまたま手に入れた権限を既得権として手放さず、業界団体のようなものを作って横並びに群れたがる。それを中央省庁が、直接・間接にコントロールしている。出版・ジャーナリズム業界も例外でない。だから、官庁の意向に本当に逆らう言論を貫くのは難しい。けれども、国民が官庁をコントロールすることこそ民主主義のはず。精力的な取材にもとづく猪瀬氏の言論は、行政改革の必要性を、有無を言わせぬ説得力で訴えかける。彼の仕事を読者が支持するなら日本にも希望がある。

北朝鮮の動静は、今年も一年を通じて各誌で取り上げられたが、毎号のように特集を組んだ『サピオ』の活躍が目立った。小林よしのり氏の『ゴー宣』掲載を引き受けた意欲も買える。

台湾、香港をめぐる東アジアの動向も、目が離せない。『中央公論』に毎号掲載されている『フォーリンアフェアーズ』論文の翻訳シリーズは、手軽に読めて役立つ。

なお『大学は変わります』には鷲田氏や橋爪氏の論以外に、大学教授が女性にとって魅力的な職業であることを強調する井上治子氏の「女性に最適職業としての大学教授」や、東大理系研究室における人権無視等を院生が告発した「大学は変わりません！」などが所収されており、こちらも一読の価値がある。（茶）

ISSN 0388-7162

6月号

おまけ

ほん

第242号　96.6.17
'71年10月25日　創刊
東大生協「ほん」
編集委員会
東大生協書籍部内
TEL(3811)5481

大学＜自由化＞の時代へ
高度教育社会の到来
鷲田小彌太著
青弓社　二〇〇〇円

大学は変わります
鷲田小彌太（編著）・橋爪大三郎ほか
青弓社　二〇〇〇円

## 笠井潔『国家民営化論』を読む

# 徹底した個人主義の立場から国家やあらゆる社会制度の必要性を疑う

## 橋爪大三郎

hashizume daizaburō 東京工業大学教授・社会学

### 敬意と異論

### 国民主権（立法権力）と諸個人の自然権との矛盾を解消する道

### なぜ国家を解体するのか

奇妙な本が現れた、と読者は思うかもしれない。

題名のごとく著者・笠井氏は、国家の民営化を主張する。つまり、裁判所も警察も刑務所も民間の企業に経営させ、議会や軍隊や文部省や大蔵省や通産省はさっさと解体してしまおう、という大胆な提案だ。「なんて非現実的な！そんなことあるわけない」と思えば、この本から何も汲み取れなくなる。思考実験であるからには、そういう想定に本気でつきあわないとだめである。

まず、著者はなぜ、国家を解体しようと考えるのか。それは著者が、個人の価値を絶対視するからである。個人の自由を制限し、個人の思想を抑圧し、個人の生命・財産を危険にさらす国家（国家はつねに、多数者の専制を帰結し、抑圧的であり、侵略的である、と笠井氏は考える）の存在を、著者は許すことができない。人間の尊厳のために、彼は国家と対決する。

こう言えば、はて、どこかで聞いたような、と思い当たろう。国家の死滅はかつて、マルクス主義の最終目標だった。そのために共産党の独裁、権力をうち立て、市場を解体するというのが戦略だった。これが成算のない試みであることは、ソ連の崩壊によって明らかになっている。これに対して著者は、市場に依拠して国家を解体する戦略をとる。そのために、競争市場の自由と効率を最大限に発揮させる。だから、資本主義のメカニズムに与することをいとわない。アナルコ・サンジカリズムを突き抜けた、アナルコ・キャピタリズムである。言っていることが保守派と似通っていても、「心は左翼」なのだ。

国家の業務をすべて民間に委託させようという発想は、笠井氏が初めてのべたものではない。ハイエク、フリードマン、ノージックらの流れを汲むリバータリアン（絶対自由主義者）の過激派、ピエール・ルミューやマレー・ロスバードといった人びとが、《国家による強制の代わりに極端な契約の自由》（一二七頁）を主張していた。いっぽう著者は、中曽根時代の国鉄民営化をみて、警察民営化を思いついたという。ここからふくらんでいった著者の構想は、《異なる思想的前提から出発して、具体的な問題に関しては、偶然に似たような場所に出たという感じ》（一三一頁）で、リバータリアンの思想と接点をもつに至ったという。

### 極端な左翼的主張にして右翼的主張

そんなわけで、本書は極端な左翼的主張であり、同時に右翼的主張でもある。著者も言うように《「右」と「左」の分類が、もはや失効している》のだ。社会党や共産党のような《従来の「左」は、経済的には「大きな政府」派》（一三〇頁）だったが、著者はその反対に、そもそも政府の解体を主張し、すべてを個人とその契約（民間の保険会社や警備会社）に解消すべきだとする。この主張は、連邦政府の銃規制に反対して武装訓練にはげむアメリカの極右団体とそっくりである。

こうした笠井氏の、粗削りだが徹底した国家民営化論に、私は敬意を払いながらも、どうしても異論を挟まざるをえないという複雑な感想をもった。

敬意を払いたいのは、本書の基調に対してである。笠井氏は徹底した個人主義の立場から、国家やあらゆる社会制度の必要性を疑ってゆく。その疑いは、単なる懐疑でなく、それを市場でどう代替するかという具体的な提案をともなっている。六〇年代に全共闘と同時代を生きた左翼的知性が、そこから思索を深め発展させて、こうした地点にたどりついたのは、余人のよくなしえぬ稀有な研鑽のたまものである。

異論は、著者がこうも国家を目の敵にする理由がうなずけないことである。笠井氏は、市民社会と国家の関係について《ルソーの一般意志論は、ヘーゲルの理性国家論に継承される》（一七七頁）とのべ、そこから、国民主権（立法権力）と諸個人の自然権との矛盾を解消する道をさぐり始める。その答えは、諸個人の自由な契約にもとづかない一切の制度を否定すること、すなわち《国家を市場に解体する》ことである。市場では、諸個人の合意にもとづく契約がすべてである。そこから、遺産相続を廃止する（諸個人は平等なスタートを切るべきだから）とか、育児費用を社会が負担する（《結果として、核家族の解体は一挙に加速されるだろう》（八〇頁）と著者は予想している）とかいった極端な施策が導かれる。納得できない箇所があるたび、本書の欄外に？を記入していったら、？だらけになってしまった。議論が粗削りなためもあろうが、むしろ、本書の構想そのものに問題があるのではないかと思う。

本書は、諸個人が自由に交わす契約を基準にとる。そして、《慣習法、市場の法、裁判所の立法機能という三つの原則から……自由社会の新しいルール形成システムを構想しうる》（一七八頁）とする。しかし、たとえば人びとが慣習法に従うのは、自由な契約の結果だろうか？　そもそも契約の実効性を保証するには、なんらかの外的拘束（言うなれば権力）が必要ではないか？　それを認めるなら、国家を否定すると矛盾が生ずるのではないか？

本書を何回か読み返したが、かりに著者の主張するような社会が実現しても、国家のある社会に比べて個人の自由はいささかも拡大せず、かえって混乱が大きくなるばかりではないかと私には思えてならない。アメリカの「小さな政府」論者は、貧者切捨て←金持ち優遇のドライな個人主義者たちに支持されている。個人主義の伝統があまりに脆弱だった日本で、こうした議論がひとつの選択肢に加わることは大切だと私は思うけれども、だからと言って、著者の示す方向が最善で賢明な道だとはとても思えないのである。

（東京工業大学教授・社会学）

---

日本経済新聞　1996年（平成8年）7月7日（日曜日）　おまけ

## ウエーブ

# 「オウム」生む社会を解読

## 戦後日本の精神構造と連関

日本中を揺るがせたオウム真理教事件をめぐり、活発な論議が繰り広げられている。地下鉄サリン事件から教団幹部の逮捕にいたる時期、風俗的な話題が世の関心を呼んだ。その狂騒が冷めた後、現代日本の精神状況を解読する知的な格闘が静かに始まっている。

□　□

「オウムが、あるいはオウム的なものが、私自身もそうでありうる可能性を示している、という自覚なしには、このようなものを書くことはなかっただろう」。一九五八年生まれの社会学者、大沢真幸氏は近刊の『虚構の時代の果て』（ちくま新書）にこう記した。

オウムが抱いていたハルマゲドン思想のくだらなさを嘲笑（ちょうしょう）するのはたやすい。だが、その「くだらなさ」が特殊でない多くの人の行動をとらえてしまった根拠にまでさかのぼれば、社会学的な分析に大切な意味が出てくる。

これまで指摘されている通り、大沢氏もオウムの思想を終末イメージに彩られた七、八〇年代サブカルチャーのパロディーと見る。例えば、教団施設にあった空気清浄器と人気アニメ「宇宙戦艦ヤマト」に出てくる放射能除去装置の名前が同じ「コスモクリーナー」だったといった点を確認する。過去の新興宗教では、貧困や病気が入信を促すことが多かったのに対し、オウムの場合は不幸が何もないという空虚さが入信動機となっている。サブカルチャーのパロディーや空虚さの克服が現実の全否定へと暴走していったのはなぜなのか。

大沢氏は「近代」のルーツを古代ユダヤ教の一神教〜〜〜〜〜〜〜〜〜オウム真理教を論じる著作物の刊行が相次いでいる

それ自体はむき出しのロジックだが、そこに冷戦の崩壊や自殺本の流行に見る生の無意味化といった時代相を重ねていく。

評論家の芹沢俊介氏は「イエスの方舟」をはじめ、日本の新しい宗教に注目してきた。近著『「オウム現象」の解読』（筑摩書房）の中で同氏はオウム真理教は突然変異ではなく、ニューエイジのムーブメントににさかのぼり、救済へと直線的に発展する時間の流れ方を分析する。そして、その近代の論理を戦後日本にあてはめる。社会変革の理想が否定された後、なお理想の純化を目指せば、論理的に理想は自己否定され、虚構の肯定を招く。それが現実の否定、世界の破壊へとつながっていくというのである。

ニューエイジとは、新霊性運動ともいわれ、一九七〇年ごろから同時的に先進国の都市で展開している運動。芹沢氏はこんなふうに分析する。若者の優しさは「心配をかけないという形で働きかけをやめる」ようの不全をもたらした。その内向から「自分探し」が始まり、「自分が変われば世界が変わる」というニューエイジの流れに合流していったー。日本の戦後五十年はこの「自分探し」が露出する過程だったという。

社会学者、橋爪大三郎氏の分析によれば、戦後の日本人は自らの意志で体制を選んでいないコンプレックスを持ち続けたという（南風社刊『オウムと近代国家』）。子供は親から「自由にしていい」という指示とこれをしてはいけない」という禁止を同時に示されると精神的に分裂する。専門用語でいうダブルバインド状況がアメリカと日本の間にあり、オウムもまた、この戦後の精神構造の中にある、と橋爪氏は指摘する。教団が極端な反米主義だったことは記憶に新しい。

□　□

先日行われた「宗教と社会」学会では、オウムを生んだ神秘主義などの潮流が事件の後、衰退することなく、拡大していると報告された。若者たちの「身体や意識を束縛と感じる感受性」（芹沢氏）、それを乗り越えるための超能力への関心は、むしろ進行しているかに見える。オウム的なものをいかにして超えるか。大沢氏は社会学的な考察、格闘の果てに「他者に対する徹底した寛容」という言葉をしぼりだしている。

文化部　内田洋一

『文学を科学する』井口時男・徃住彰文・岩山真一著　1996.11.20発行　帯・扉　朝倉書店

## スリリングな知の交響――橋爪大三郎

自然言語のコンピュータ処理，認知心理学，それに文芸批評。異なるバックグラウンドの3人が，それぞれの方法を駆使して文学作品の解明に取り組む。あえて文学という，人間のもっとも高度な知的活動の所産を共通の素材に取りあげ，めいめいの手の内を明らかにしあった。

とりわけ興味深かったのは，3人が三つ巴となって文学を縦横に論じる「共同討議」である。互いの分野に素人同然だからこそ，なおさら厳しいものになる突っ込みの応酬。専門に閉じこもることを許されない知的な緊張を，読者は堪能できるはずだ。

こうした異種格闘技にも似た試みは，これまでありそうで，実は少なかった。本書はあらためて，そうした試みがみのり多いことを教えてくれる。先端的な仕事は，できあがった専門の垣根の内側よりも，垣根と垣根のあいだに埋まっている。既成の専門が苦手とする領域でこそ，新しいアイデアの真価が試されるのだ。

本書の最大の貢献は，文学のように大事な研究対象が，どれほど解明されないまま放置されているのかを明らかにしてくれたことである。本書は，文学研究の決定打とは言えないけれど，少なくとも今後の方向を示した。あとは読者が頑張ってほしい――そう誘いかけているのが，本書なのである。

### スリリングな知の交響

橋爪大三郎

自然科学と，社会科学・人文学は，不幸な別居状態を続けてきた．欧米では必ずしもそうでなかったのだが，少なくとも日本では，理系と文系は，学部が違い，“人種”が違い，交流などないに等しかった．

これは，後進国の態勢である．実験機材が高価だったので，適性のある（＝数学のできる）人間だけを理工系の学部に進学させ，効率よく外国の成果を学ばせる．残りは，自然科学のわからない文系人間になる．戦前の高度国防国家も，戦後の高度経済成長も，これでやってきた．

このやり方の行き詰まりが，最近目につくようになった．本来全体的なはずの知識が分断されているから，人間としても中途半端だし，社会をリードする独創的なアイデアやビジネスが生まれて来ない．そこでわが国も，遅まきながら「科学技術創造立国」の看板を掲げることになった．

その決め手は，理系と文系が融合することである．理系人間と文系人間が集まって「学際」研究をしてみても，手遅れである．１人ひとりが理系，文系の両方の学問を，学生時代から身につけておく必要がある．数学と論理学・哲学，物理学と経済学，情報科学と心理学，……理系と文系の学問は，その成立した始めから今に至るまで，連関しあうひとつながりの全体だったのだ．

そうした学問本来のあり方を，最先端の課題に取り組む異分野の人びとの共同作業として追求する――インターレクチュアライブラリは，そんな楽しみな，スリリングなシリーズになりそうだ．

---

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞　おまけ

制度の生成3

**橋爪大三郎**
『言語ゲームと社会理論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

---

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.177 朝日新聞　おまけ

性愛のかたち・家族のかたち2

**橋爪大三郎**
『性愛論』
岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的な方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」（＝性愛領域が他の社会領域から隔てられていること）を軸に、猥褻が現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデオロギーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」におすすめの一冊。

---

# アンケート特集 一九九六年の収穫

週刊読書人
1996年（平成8年）12月20日（金曜日）第2165号

**橋爪大三郎**

小林よしのり『新ゴーマニズム宣言・脱正論論』（幻冬舎）。「HIV訴訟を支える会」との関わりを同時進行で描いた『ゴー宣』の連載を軸に、浅羽通明、泉谷しげる、呉智英氏との対談、秘書・金森由利子氏の活動日記を収める。〝運動を自己目的化するな、学生は日常に戻れ〟という呼びかけは、戦後市民社会を新たな質に高めるもの。

小室直樹『これでも国家と呼べるのか』（クレスト社）は、金融破綻と巨額の財政赤字を生み出した大蔵官僚の、組織硬直化を鋭く批判する。処方箋は、不動産を証券化し不良銀行を倒産させよというもの。正論である。

山本泰・山本真鳥『儀礼としての経済』（弘文堂）は西サモアの贈与儀礼を題材に、交換を宿命とする人間社会のモデルを構成した社会人類学の力作。豊富なデータにもとづく大胆な仮説は、わが国の従来の水準を越える画期的な達成である。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

1996年（平成8年）6月2日（日曜日）
日本経済新聞
SUNDAY NIKKEI

■読書

# 現代日本のリベラリズム

佐伯　啓思著

## 保守主義的立場から戦後診断

《私にとっては、最初の「現代日本についての評論集」》と「あとがき」にある。冷戦の終結した九〇年代になって、いよいよあらわになってきた戦後日本社会の矛盾を、鋭くえぐる文章が並んでいる。

著者の立場は、いわゆる保守主義。それも《レーガンのおこなったことは、……バークにまで遡れるイギリス本流の本来の保守主義とは似ても似つかない》とのべるほどの、本格的な保守主義だ。当然、丸山真男、大江健三郎をはじめとする戦後の進歩的知識人たちが残らず批判の対象となる。

本書の論旨は、単純かつ明快だ。まず、資本主義市場経済は、《安定した社会》（＝伝統）がベースにあって、はじめてうまく機能すると考える。また、国家（公的存在としての個人）があってはじめて、私的な存在としてのわたしが生ずると考える。このことを忘れ、ひたすら無制限な権利の主体、欲望の主体としての個人から出発したのが、戦後の誤りだった。その結果、経済は繁栄したが、公共的なもの、健全な国家意識が見失われたとするのが著者の診断である。

佐伯氏の指摘に、なるほどと思うところが多い。特に、戦後の言論が議論を単純化する点で暴力的だという指摘は、その通りだ。

ただ、あえて言えば、それを指摘する本書の図式もやはり単純だと言えないか。繰り返し出てくるのは、フランス（理性主義的な憲法システム）／イギリス（慣習法的なシステム）の対立。戦後日本が前者でためだったから、これからは後者で行くべきだと、要するに言っているだけのようにも思える。戦後言論の二分法を巧みにひっくり返すのだが、その論法がやはり二分法なのである。

保守主義のスタンスを示すことは、とても大事である。だが、問題はいまその先にある。憲法にせよ戦争責任にせよ宗教問題にせよ、日本の直面する具体的な課題に対して、もう少し著者自身の実際的な提案を聞きたいと思った。

（講談社・二、三〇〇円）

東京工業大学教授　橋爪　大三郎

1996年（平成8年）12月8日（日曜日）
日本経済新聞
SUNDAY NIKKEI

■読書

# 社会科学をひらく

ウォーラーステイン、グルベンキアン委員会著

## 「再統合」提案、歴史性にも注目

世界的に権威あるポルトガルのグルベンキアン財団が、ウォーラーステイン氏を座長に十人の社会・人文・自然科学者を集め、社会科学の将来像について徹底討論した結果をまとめたのが本書だ。

政治学／経済学／社会学。この三つが十九世紀以来、社会科学の中核だった。それは、欧米の先進国で、国家／市場／それ以外の社会領域がそれぞれ自律的に運動してきたのと、表裏一体のことだった。それがいま、さまざまに細分化した専門分野の垣根を張りめぐらせて、社会科学を窒息させている、と著書たちは診断する。

一九四五年以来、アメリカは強大な力を背景に、政治学／経済学／社会学を、普遍的な知識として世界に押しつけてきた。その後、エリア・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズなど、複数の分野にまたがる学問が台頭してきた。欧米中心の世界が崩れつつあるいま、それらを手本に、細分化した専門の垣根を取り払い、社会科学を再統合すべきである。そのために大学の機構改革にも着手すべきだと、本書は提案する。

大筋で賛成できる提案だ。

本書は、マルクス主義のリバイバルの試みだとも言える。

かつてマルクス主義は、社会科学を歴史学・哲学で基礎づけ、体系的な知にまとめあげていた。それが衰退し、社会科学は、政治学／経済学／社会学といったアメリカ流の法則定立科学に帰着した。そこで著者たちは、新しい歴史学に注目する。そして、普遍的な法則の定立をうたう社会科学も、歴史的な偶然の産物に過ぎないとする。委員の一人、自然科学者のプリゴジン氏は、自然科学でも均衡を離れた系で不可逆の時間が無視できない以上、社会科学も歴史を無視できないはずだと、ウォーラーステイン氏を応援している。

社会科学の再組織は必要だ。だがそれは、既存の専門の垣根を取り払えば、すぐ実現するのか。新しい理論展開も必要なはず。来るべき社会科学のイメージは、本書でもまだ漠としている。山田鋭夫訳。（藤原書店・一、八五四円）

東京工業大学教授　橋爪　大三郎

おまけ　『BOSS』第2巻第1号通巻2号　1997.1.1.発行　pp.71　三笠書房

特集＝神がかりビジネスの時代

# 実践『脳内革命』日記

400万部という平成最大のミリオンセラーとなった『脳内革命』。著者の春山茂雄氏はテレビに講演にと引っ張りだこである。そんなに凄い本なのか、と聞かれていることを実践してみた。

文＝中田　潤　写真＝坂井　和

私は、「脳内革命」なんかより、すっきりする本を書いている社会学者の橋爪大三郎さんを訪ねた。

「人間はみんな平凡なのです。そして、みんな現状よりよくなりたい。その方法はいろいろありますが、一番手っ取り早いのが麻薬です。世界中で麻薬の購買者を合計すれば何億人にものぼるだろう。

しかし、日本では、麻薬が禁止されている。現状を抜け出して平凡な自分を忘れたい人たちはどうするかというと、旅行に行ったりおいしいものを食べたり、ギャンブルをやったり、ちょっとせこい方法で我慢しなければならない。さて、そこに、「麻薬が脳の中から出てくる」という話が出てきた。わざわざ高い金を払って、吸ったり打ったりしなくてもいいわけだ。合法で副作用もなくて、しかも、トリップできる。平凡な人たちにとって、これは有難い話です」

先進国家のなかでの日本という国の特殊性がその背景にある、と橋爪さんは指摘する。

「もう一つは、これが人生論、人生哲学の体裁をそなえているということです。余分なことを考えなくてもこれ一冊ですむんです。人は知識を身につけたり経験を積んだりして、結局、何を実現するかというと人間の幸せです。人間の幸せとは何かというと即物的ですが、『脳内モルヒネ』が出ている状態です。これは手っ取り早い」

つまり、現実逃避が困難な国での安易な解放の書が『脳内革命』だったということか。

「この本はアメリカでは売れにくいと思う。アメリカには本物の麻薬があるし、宗教もあって、こんなみみっちいやり方ではなしに日常に苦しむ人びとを組織している」

この構図から浮かび上がってくるのは、「医者の看板を掲げながら、病気で悩んでいる人は門前払い。健康な人から100万円を集めてその資金を運用する」という実に巧妙な集金システムである。すでに社会的名声のある「名医」がどうしてそんなことをしなければならないのだろうか。

橋爪大三郎さんは言う。

「それはおかしい。医学の看板を掲げるからその金箱が取れるのであって、治療はしませんと言うのなら、コスト＋適正利潤＝定価のはずですから、良心的にやっているのなら100万円なんか取れるはずはない。本を読んだときはもうちょっとましかと思いましたけどね」

おまけ　Simulation Report　「神々」は死んだか？

「教団」が去り小さな神々が急増中！「キャンパス&路上宗教」のオウム後の生態　河野浩一

『SAPIO』第8巻　第7号通巻159号　1996.4.24.発行　pp.27-29　小学館

また、若者の宗教への傾倒は、所属すべき集団を探す行為だというのは、東京工業大学教授の橋爪大三郎氏だ。

「昔から日本人は集団に所属することで救済を求めてきた。ところが、バブル以降、そうした集団はますます見つけにくくなっている。そもそも既存の宗教は4000年前に息絶えている。今はもう形として残っている存在に過ぎず、実際に脈打っているのは、新しい宗教だけなんです。さらに、新宗教、新・新宗教といわれるものは、敗者復活戦の場でもある。いい大学、いい企業が目的となった今の教育の中では、ひと握りの勝者がいる一方、大多数の人間は敗者とならざるを得ない。その彼らにとって、修行でステージを上げるのは、親を始めとする自分の回りの人々とは違う階層の人間になることを意味する。それが非常に価値のあることなんです」

『ベストセラーはこう読め』　特集アスペクト4号　1996.11.25.発行
pp.67〜73　パンアート

# 情報整理って簡単だったのね。封筒を時間順に並べるだけです。

インタビュー●橋爪大三郎
interview to Daisaburo Hashizume

『「超」整理法』はものを作ることを仕事にする人の本です。たとえば、画家のアトリエや工房には「文法」がある。どうやってアトリエを設計していくかについての作法をのぞけるのがこの本です。アトリエにはそれぞれの画家によって絵の具や画材の並べかたや使いかたなどのさまざまなルールがある。いろいろと創意工夫があるわけです。日々違った生産物を作り出していかなければならないんです。これが工場ならそのような創意工夫は必要なく、初心者が熟練して均質になって生産すればよいわけです。画家のアトリエはそうはいかなくて常に新



おまけ　『SAPIO』第8巻第17号通巻169号　1996.10.9.発行　pp.73

しくなければいけない。それが工房やアトリエの特徴で、そこにはその画家なりの工夫があります。著者の野口悠紀雄さんは経済学の研究者なので論文や原稿を生産していますが、研究者としての仕事は常にオリジナルで情報価値を持っていなくてはならない。研究を仕事にしている野口さんが、多くの経験から得た、新たな情報価値を生むための作法がこの本には書いてあるわけです。

アトリエの作法の特徴は、何よりもそれが生産手段だということです。それはその生産手段を使って生み出されるアウトプットに対する生産のコストという言いかたもできます。コストを考えるとき、プロダクティビティ(生産性)が重要で、コストが一定ならアウトプットは多い方が、アウトプットが一定ならコストは小さい方がよいわけです。だから単純にコストにかければよいわけではない。だから『「超」整理法』では「簡単にできる」こと、つまりコストをかけずにすますことがテーマになっています。簡単に言えば、時間を節約する。よけいなことをしない。それでいて生産性は下がってはいけないので、必要なことはしなくてはならない、そのぎりぎりのところに情報価値があるんですね。

本来アトリエの文法は、ルネサンス時代のミケランジェロやダ・ヴィンチのように、師匠から弟子に伝えられてきたものです。研究室なら教授がプランを立てて研究費を確保して、助教授は研究室の陣頭指揮をする、助手や技官が大学院生の尻をたたき、学生は兵隊と呼ばれてこき使われる、という構図があります。このように研究室、アトリエごとに生産を進めるための伝統があったわけです。『「超」整理法』のようにアトリエの作法を教える本が人気になるのは、そのような伝統が弱まったか、アトリエや研究室に自分の書斎をなぞらえようとする人が増えたかです。あるいはその両方かもしれない。そうなるとそのような伝統のないところに、文法を作らなくてはならない。伝統的な親方（マスター）の代わりに登場してくるのが「整理法の達人」、「知的生産のチャンピオン」です。それが経済学に通じ、文系、理系をまたにかけて活躍する野口悠紀雄さんなわけです。この本を読めばつまり、知的マスターの作法に従えば知的生産性が上がり、最小のコストで最大のプロダクティビティが得られるという幻想を人々は持つことができる。それがこの本を買うことの動機になっていると思います。アトリエの文法を教えるということ自身が情報価値があるという現象がこの超整理法のベストセラーの背景です。

1950〜60年代には、川喜多二郎さんのKJ法や京都大学の人文研究所の梅棹忠夫さん、桑原武夫さんたちによるカードを使った方法が提唱されましたが、これらと現在の『「超」整理法』とでは、一見すると同じ知的生産の技術と見えても、めざすところがずいぶん違います。ではどのような点で違っているのか。

まず戦前の知的生産がおかれていた状況を考えると、「超」整理法などが介在する余地がまったくなかったと思う。研究者にとって貴重な情報源である洋書を手に入れることのできる人は限られていました。何より本が少なかったわけです。研究室というのはそういう貴重な本が集まっていたところでした。今と違ってコピーがなかったから学生たちは洋書を読みながら手書きで大学ノートに写すわけです。そうして1年間筆記し続けても、書き写せる量、つまり情報量には限界があった。かつては洋書を読みそれを筆記していくのが知的生産だっだんです。これでは情報整理の必要もなかったわけです。1950〜60年代までそういう時代が続いた。ところがアメリカでは1920年代から情報のシステマティックな整理法を採用していました。第一次世界大戦後にはタイプライターが標準装備となり、手で文字を書くことが規格はずれになってしまい、1940〜50年代にアメリカではコンピュータが開発され、データバンクやシンクタンクがすでに誕生しようとしていました。日本でのワ

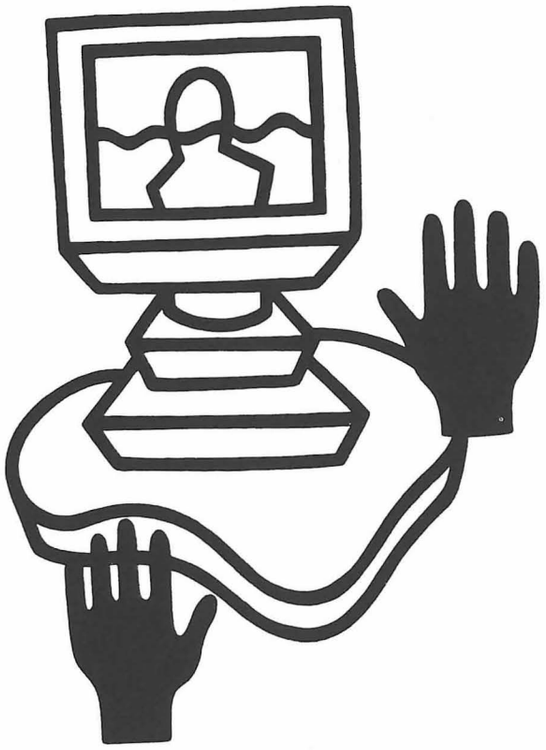
ープロの普及が１９８０年代だということを考えると約半世紀の遅れがあり、知的情報の体系化に関して、日本よりはるかに先をいっていたわけです。これでは日本の知的生産の未来はおぼつかないと、将来の情報化時代に備えて知のシステムを体系化し、アカデミックな生産性を上げようとした試みが京都大学の人文研の人びとが考え出した方法です。もちろん当時のことですから、電子的な手段は使わずカードで、個人的なレベルでデータベースに基づく考え方で情報を体系化し、共有しようとしていた。

当時は大学への進学率も現在と比べればはるかに低く、まして研究者などはごく一握りの人たちです。つまり、60年代の知的生産の技術というのは、アカデミズムの中の選ばれた人のためのものだったわけです。そこで目的とされたことは、知的であることが前提となっている人々がさらに知的生産のプロダクティビティを上げ、システマティックに研究を行うためのもので、普通の人にはまったく関係がなかった。ここが現在の『「超」整理法』とは決定的に違う点です。

現在のような過剰な情報の中で、『「超」整理法』が受け入れられているようになった背景のひとつにはコピーの普及があります。コピーの価格が下がり、学生でも使えるようになるのは１９６０年代後半からです。そし80年代の後半になるとコピーはコンビニで10円になり、情報がどんどんコピーされて広がっていくようになる。その結果オリジナルテキストの貴重性がなくなるわけです。今や社会人や学生に限らず、子どもたちですらコピーの氾濫の中で埋もれているような状況です。紙が大量に消費されるようになっていくわけです。

さらにコピーの普及に加えて、ワープロの普及が情報の供給過剰に拍車をかけました。１９８１年に東芝の「トスワード」という最初の普及型ワープロが登場して以来どんどん価格が下がり、１９９０年代頃には誰でも使うようになっていきました。ワープロやパソコンは文字を書くことのコストを下げます。コストが下がれば誰でもが簡単に書けるようになるため文字を書く人が増え、結局情報の供給が過剰になってくる。そうするとどうでもいいようなものまで大量に文字情報として出現するようになって、情報のデフレが起こります。ゴミのようなまったく役に立たない情報が増えていく。これが現在の私たちを取りまく状況であり、現在さかんに騒がれているインターネットでも同じことが言えると思います。

では、私たちはこのような過剰な情報に対してどのように防衛しているかというと、自分のアウトプットはそ



のままにして、ほかから入ってくるアウトプットを絞ってしまえばよいと考えるわけです。そこで求められるのが「整理法」です。現在情報の整理法が求められているのは、コピーやワープロの普及がもたらした情報の過剰に対応しているわけです。梅棹さんやKJ法の時代には反対に情報が不足していて、それをどう補強するかということに対応していたのでした。

それともうひとつ、『「超」整理法』以前には情報の過剰に対応するアトリエの文法を作り出すという発想がなかった。いい換えるなら、情報は貴重であり、それを分類整理して保存するための方法論で、情報自身には価値があるということを前提にしている方法ばかりだった。そうするとコストが増えたり疲れたりして、ますます生産性は伸びなくなってしまうし、情報量が増えるとあるところで臨界点を超えてしまう。それに対して『「超」整理法』は1年使わなかった情報は価値がないから捨ててしまえ、と言う。従来の情報には価値があり、後生大事にとっておかなくてはならないという、情報の呪縛から解放してくれたわけです。そこには、情報は捨てても簡単に同じものが手に入るという前提がある。その根底にあるのは、皮肉なことにコピーです。「どうせ私が持っているのは何かのコピーなのだからなくなっても誰かが持っている」という発想の転換がある。超整理法は「整理はしなくてはいいです」ということで情報の呪縛から我々を解放してくれましたが、コピーが、殺到し情報が日に日に増えてくる状態についてはこの本は何も手を打ってはいません。そういう状態がちょっと病的かなとも思いますが。情報の成人病に患っている私たちのダイエットが『「超」整理法』です。以前の整理法とは明らかに価値観が違うんです。野口さんは昔ながらの整理法を自分でいろいろ試して失敗した結果、過去の整理法の価値観を逆転し、すっぱり割り切ったのだと思います。

実際に野口さんのように、ものを生産している人がコストを節約していくなら合理化に結びつきますが、えてして、自分が何かを生産しているという知的スタイルをファッションとして身につけなければ気がすまないという、陥りがちな見栄っぱり感覚です。情報時代を生きているんだ俺は、と自分に言いきかせながら、わざわざ封筒を買ってきて本棚に並べる。けれども、それでおしまい。そういう人にとってはコストが増えるだけで単なる無駄です。そんな人は何もしなくていい。ただ情報を捨てればいいのです。

おまけ　『BOSS』第2巻第1号通巻2号　1997.1.1.発行　pp.71　三笠書房

特集＝神がかりビジネスの時代

ポジティブ・シンキング、瞑想、ウォーキングに挑戦してみたが…

## 実践『脳内革命』日記

400万部という平成最大のミリオンセラーとなった『脳内革命』。著者の春山茂雄氏はテレビに講演にと引っ張りだこである。そんなに凄い本ならと、書かれていることを実践してみた。

文＝中川　潤　写真＝坂井　和

私は、『脳内革命』なんかより、すっきりする本を書いている社会学者の橋爪大三郎さんを訪ねた。

「人間はみんな平凡なのです。そして、みんな現状よりよくなりたい。その方法はいろいろありますが、一番手っ取り早いのが麻薬です。世界中で麻薬の購買者を合計すれば何億人にものぼるだろう。

しかし、日本では、麻薬が禁止されている。現状を抜け出して平凡な自分を忘れたい人たちはどうするかというと、旅行に行ったりおいしいものを食べたり、ギャンブルをやったり、ちょっとぜこい方法で我慢しなければならない。さて、そこに『麻薬が脳の中から出てくる』という話が出てきた。わざわざ高い金を払って、吸ったり打ったりしなくてもいいわけだ。合法で副作用もなくて、しかも、トリップできる。平凡な人たちにとって、これは有難い話です」

先進国家のなかでの日本という国の特殊性がその背景にある、と橋爪さんは指摘する。

「もう一つは、これが人生論、人生哲学の体裁をそなえているということです。余分なことを考えなくてもこれ一冊ですむんです。人は知識を身につけたり経験を積んだりして、結局、何を実現するかというと人間の幸せです。人間の幸せとは何かというと即物的ですが、"脳内モルヒネ"が出ている状態です。これは手っ取り早い」

つまり、現実逃避が困難な国での安易な解放の書が『脳内革命』だったということか。

「この本はアメリカでは売れにくいと思う。アメリカには本物の麻薬があるし、宗教もあって、こんなみみっちいやり方ではなしに日常に苦しむ人びとを組織している」

この構図から浮かび上がってくるのは、「医者の看板を掲げながら、病気で悩んでいる人は門前払い。健康な人から100万円を集めてその資金を運用する」という実に巧妙な集金システムである。すでに社会的名声のある「名医」がどうしてそんなことをしなければならないのだろうか。

橋爪大三郎さんは言う。

「それはおかしい。医学の看板を掲げるからその金額が取れるのであって、治療はしませんと言うのなら、コスト＋適正利潤＝定価のはずですから、良心的にやっているのなら100万円なんか取れるはずはない。本を読んだときはもうちょっとまともかと思いましたけどね」

おまけ　1996年（平成8年）3月22日（金曜日）
週刊読書人
発行所　株式会社 読書人

# 人は、どうして生きているのか

## 「オウム以後」の思想の言葉

**悪夢の地下鉄サリン事件から一年。一連のオウム事件が社会にもたらした影響ははかり知れない。本紙では先頃、この問題の思想的側面から、評論家の武田徹氏に事件をめぐる言論の現状について論じてもらったが（本年2月9日号1面）、それを受ける形で、文筆者の切通理作氏に、オウム事件以後の思想のあり方について論じてもらった。（編集部）**

### セカイとのつながりの回復を求めて

「現在」をどう生きぬくか

切通理作

#### 実感のなさに恐怖

批評集『お前がセカイを殺したいなら』（フィルムアート社）を出して一年になる。この入稿直後に地下鉄サリン事件が起きた。

オウム問題はさまざまなスキャンダルを産み、また思想的な論議を巻き起こしたが、大方の大衆にとっては、センセーショナルに語られれば語られるほど、実感から遠くなるという感じだったと思う。

死者の痛みも、殺人者の血に濡れた手の感触もともに遠い。しかし、世界各国からは「初めての毒ガステロ」と身構えられる。そう言われても、緊迫感は今一つだった。

お前がセカイを殺すまでもなく、このセカイで生きている実感としての自分は、「すでに死んでいた」とでも、囁かれているような気さえ、私はしていた。

ジャーナリストの江川紹子が、オウムの顧問弁護士にして信者であった青山吉伸の「救済」の思想について評価を下したことは忘れられない。

「頭ではこれはいけないんだ、なぜならばと組み立てはするけれども、実感がともなってないから他を感動させることがないし、説得力もない。観念論。机上の空論という感じしかしない」（『サンサーラ』95年12月号）

この指摘は、オウムのことのみならず、自分のことまで言われたようで、恥ずかしく思ってしまう。まるでパズルを解くように、現実を図式化して見ているだけの、私を含めた「分析者」たちの自己像を見せつけられたような気がしたからだ。自分は蚊帳の外において、オウム問題を語る者。それらの言説を、更に上から見下して、俯瞰的な展望を語ろうとする者。もうキリがないし、どうでもいいという感情にもなる。

上九一色村に強制捜査が入る一日前、雑誌の取材でそこを訪れたのも、もう「記憶」の範疇に入る出来事だ。その際、後に逮捕されることになる信者に、ハルマゲドン予言は、「死」というものを身近に思っていない世の中の人間にそれを実感させるために主張しているのだと（柔和な顔で）言われた時の戦慄が、私のオウム評価の原点になっている。当時はまだ、オウムがサリンを撒いたとは確定されていなかったが、私はオウムの思想を恐ろしいものだと予感したし、事実がほぼ確定された今、それは確信となった。

#### 「悟りのゲーム」へ

東京大学教授・山口瑞鳳は、オウム事件以前、『チベット死者の書』がブームになった頃から、雑誌『諸君！』や東大出版会の『UP』誌などで、オウムの信仰の元になったニンマ派の信仰を「あれは仏教ではない」と批判している。本来、目に見えなければ体験も出来ず、「不可知」と言う実証はすべて意味がない」などとインタビューや説法で語っていたことの理由がハッキリ分かる。

そして山口は、真の仏教における菩薩や仏は、実在としてあるのではなく、悟りを求める者としての「理念」なのだと言っている。

「未来」と「過去」の接点としての「現在」を生きているしかない我々は「現在」を決してつかめない。しかし、「過去」にも戻れないし「未来」にも進み得ず、「現在」にしか生きれないのだ。それを認識すること。

仏教が、本来、山口の言うようなものだとしたら、それはもともと「哲学」と同じようなものだったのではないだろうか。

東京工業大学助教授・橋爪大三郎はかつて『仏教の言語戦略』（勁草書房）の中で「仏教とは悟りのゲームである」と語った。悟りが「幻想」であるとしても、悟りを求めていくということが、その人の生き方を支えるならば、それは虚偽ではない。

その意味で、私は前掲書での森岡正博の言葉に力づけられた。

「私たちの存在それ自体は、交わり合うことはないだろうし、また、簡単に交わり合ってはいけない。そのかわりに、何かの機会に、お互いの思索と行為と自己表現の一端を、かすかな電波に乗せて発信し合おうよ。こんな問いにとりつかれて、それでも生命をかけて立ち向かおうとしているのは、あなただけではないんだよ、メッセージを送り合おうよ」

私は、今年中に、『お前がセカイを殺したいなら』に続く批評集を出す。そこでは、オウム元信者を含むさまざまな立場の人々との対話も交えながら、私なりの「悟りのゲーム」を深めてみようと思っている。（きりとおし・りさく氏＝文筆者）

1996年（平成8年）3月10日（日曜日）　東京新聞

# 読書

## 消費社会批判

堤清二著

## 良質の近代主義者 日本的経営も批判

西武セゾン・グループを率いてきた堤清二氏が、混迷する現代日本社会を正面から論じた意欲作。一九八〇年代言論の多くが失速しつつあるなか、経済学、経営学、社会学、人類学ほかを縦横に踏まえた、消費社会分析の本格的な論考の登場だ。

東京大学ほかで行った講義が、本書のベースだという。大量生産・大量消費の高度成長期から高度な消費社会への変容を、流通業界の経営現場で誰よりもよく見届けてきた著者ならではの、根底的な消費社会「批判」が本書の眼目である。

システム理論、記号論、レギュラシオン理論、ポスト構造主義、バタイユ、ボードリヤール、ポランニー、ブルドュー……さまざまな議論を著者は実に旺盛に消化し、消費社会の解明に役立てる。その方法はじつにオーソドックスで、むしろお行儀がよすぎるのではと思えるほどだ。

それでは著者は、消費社会をどう批判するのか。二つの指摘が目を引いた。一つは、消費は人間本来の活動だったが、産業社会では資本の生産した商品を買うことに矮小化されてしまったという指摘。もう一つは、消費が広告のなかで実体のない欲望に変容してしまうという指摘。消費から社会を批判する視点と、社会から消費を批判する視点が、絡まっている。ひと筋縄で片づかない問題なのだ。

加えて著者は、日本的経営にも批判の目を向ける。経営者の思想基盤が貧弱なこと。従来の集団主義や共同体意識のままでは、情報化社会や国際化の障害になること。日本企業の実態をこのように厳しく見すえる著者に、良質の近代主義者を見る思いがする。

終章「消費社会を超えて」で、著者は《経済社会を全体として分析しうる理論》の必要性を説く。本書はその作業の一環だろうが、あえて言えば、素材となった理論がまだばらばらで有機的に結びついていないうらみがある。仕事はまだ始まったばかりなのだ。

（岩波書店・一六〇〇円）

社会学者　橋爪大三郎